

「情報のなわ張り理論」再考

岩 畑 貴 弘

1. はじめに

「情報のなわ張り理論」は、Kamio 1979 においてその基礎となる概念・考え方が提案された後、やや間をおいて Kamio 1987 で理論の形式を纏って提唱された。それにさらに手を加えて整理され、発表されたのが神尾 1990 の著作である。理論として提唱された 1987 年および 1990 年のものは 1979 年の当初の考え方よりもその適用範囲が大幅に拡張された。1987 年から 1990 年代前半にかけて脚光を浴びたことからわかるように、「情報のなわ張り理論」は語用論の分野において新たな地平を切り開く予感を当時の多くの研究者に抱かせた。その後、Kamio 1994、1995、1997a、1997b、神尾・高見 1998、Kamio 2001 等において大小の理論的修正を経ながら理論は精力的な発展を続けていたが、提唱者の急逝により神尾 2002 が遺作となってしまった。

情報のなわ張り理論は言語理論として示唆に富み、学界での議論を起こした理論ではあるが、ある一定の時間後は当初ほどは研究者らの興味を引く存在でなくなってしまう感は否めない。それには理由がいくつか考えられる。まず何より、1987 年あるいは 1990 年の理論に見

られた「近」と「遠」の区別、言い換えればなわ張りの「内」「外」の区別は、それが表すとおり明確な二分法であった。分かりやすい反面、それが多くの研究者に違和感を覚えさせたようである。すなわち、現実の「なわ張り」は状況に応じて臨機応変に変化するのではないか、明確に二分されるようなものではないのではないかという漠然とした違和感である。また、なわ張り理論における言語表現の現れ方の重要な表現として終助詞「ね」があるが、それが実際の「ね」の使用と必ずしも一致していないのではないかとする見方もあったようである。

そのような考えに部分的に基づく議論等を経て1994年からはそれまでの4分割をやめて6分割となり、かつなわ張りの「近」「遠」の基となる値を明示的に連続的とした比較的大きな理論的修正を行った。しかし、この修正が逆に理論構成を煩雑にして、それゆえ理論として魅力的とは言えなくなってしまったと感じる研究者も少なくなかったようである。

現在、情報のなわ張り理論はいくつかの言語学入門書において紹介あるいは言及があったり、その概念を援用した新たな研究が時折見られるが、理論に基づく新たな研究は多くは見られないというのが実情である。

しかしながら、情報のなわ張り理論が持つ独創的な考えおよびそれが提供した視点はそれ以前の言語学にはなかったものであり、言語研究への示唆に富むというのは研究者の意見の一致するところであろう。その意味では現在、なわ張り理論があまり語られることがなくなったのは大変に残念なことである。本研究では、今一度、情報のなわ張り理論の変遷を簡単にまとめてみたうえで、情報のなわ張り理論の修正案を提出する。理論の今後の発展の一助となれば幸甚である。

2. 情報のなわ張り理論の変遷

2.1 情報のなわ張り理論：1990 年モデル

この論文の読者は多かれ少なかれ情報のなわ張り理論について幾らか聞いたことがあると思われるし、詳細に説明するのは紙面が足りないので、1990 年モデルに関してここでは簡単に触れておくに留める。必要に応じて原著を参照いただきたい。

まず、理論全体の根底を成す前提は以下のようなものである。

- (1) 話し手または聞き手と文の表す情報との間に一次元の心理的距離が成り立つものとする。この距離は〈近〉および〈遠〉の2つの目盛りによって測定される。(神尾 1990、21 頁)

1990 年モデルはこのように明確な 2 分法での距離に基づくなわ張り関係を規定しているのが特徴であり、情報のなわ張りを表す値として〈近〉か〈遠〉以外の値は理論上規定していない。そして〈近〉情報の集合体が「情報のなわ張り」であり、〈近〉情報は「情報のなわ張り」の「内」、〈遠〉情報は「情報のなわ張り」の「外」と言い換えることもできる。そしてそれが話し手・聞き手それぞれに存在するという前提のため、その帰結は以下のように表すことが可能である。

(2)

		話し手のなわ張り	
		内	外
聞き手の なわ張り	外	A	D
	内	B	C

(22 頁)

ある情報が存在する時に、それと話し手・聞き手のなわ張りとの関係から上述の A から D までの 4 種類のケースが存在しうる。そしてそれぞれのケースが、日本語の場合異なる文末形式になって顕在化されているとした。

(3) A：直接形 「昨日は動物園に行って来ました」

B：直接ね形 「いい天気ですねえ」

C：間接ね形 「君は退屈そうだね」

D：間接形 「パリの冬は寒いらしい」

(22 頁)

A の直接形とは、例に表れているように断定・言い切りの形である。そして D の間接形とはいわば直接形の反対、すなわち断定・言い切りでない形である。「らしい」「そうだ」等の形であるが、それらの文末形式間に存在する違いについてはなわ張り理論では問題にしていない。そして B/C にあるように直接形・間接形それぞれに終助詞「ね」が付された形がある。これらの文末形式は、話し手と聞き手が当該情報とどのように関わりがあるかということの話し手の認知状態により決定されているというのが理論の骨子である。

上述したように、理論は当時大きな注目を浴びたが故にその修正提

案が当時いくつか出された。

2.2 Muraki and Koizumi 1989

神尾の理論に対し、Muraki and Koizumi 1989 では主に情報への近接性 (closeness) という観点から異議が唱えられた。神尾の理論では上述のように「近」か「遠」という2分法で情報との関わりが規定されているが、実際のデータに照らして検討すれば、以下のように4分割するのが適当であるという主張である。

(4) 核 (core) / 近 (proximal) / 遠 (distal) / 未知 (unknown)

この4分割の状況が話し手・聞き手双方に存在し、その状況により文末形式が使い分けられるというものである。たとえば、話し手にとって自らの核情報および近情報は直接形を用いて、遠情報は間接形を用いる。また「ね」については、話し手が聞き手と同等あるいはより遠い情報の場合に用いられると分析した。このいわば対案は、「近」と「遠」というふたつの値しかなく、その中間値がないとしたなわ張り理論への疑問をある程度解消するものであったと言えよう。ただ、「近」「遠」の他に値を2つ設けたうえでそれらと文末形式との対応を提案したという意味では、なわ張り理論の考え方や枠組を否定するようなものではなく、いわばマイナーチェンジを提案しているものである。

2.3 金水 1991

金水 1991 では、話し手と聞き手における情報所持の確実性という観点から、状況が5種類に分類されている。その際に (不) 等号を用いているという点で、後述の神尾の修正案に通じるものがあるのは非常

に興味深い。話し手の仮説の強さが「完全」である場合における (1) 話し手> 聞き手、(2) 話し手=聞き手、そして話し手の仮説の強さが弱い場合における、(3) 話し手> 聞き手、(4) 話し手=聞き手、そして (5) 話し手< 聞き手、の5通りであるとした。詳細は割愛するが、神尾の2002年モデルで不等号が取り入れられていることもあり、基本的に連続した尺度を取り入れるという考え方が正しいことは間違いないと思われる。

2.4 岡本 1996

岡本 1996 では、上述の Muraki and Koizumi 1989 や金水 1991 も考慮した上で、情報のなわ張り理論の問題点が論じられている。なわ張り理論では区別されていない、「情報所持の確実性」と「情報への関与度」は明確に区別されるべきと主張した。直接形／間接形の使い分けには、「情報所持の確実性」がベースとして存在したうえで、「情報への関与度」という要因が付加されるという考え方である。「情報所持の確実性」を高める要因として「直接経験」伝聞・推測・予測であること、「情報入手から時間の経過が少ない」などのいくつかの諸要因がリストされている (177 頁、表3)。また、話し手の「情報への関与度」を高める要因として「話し手自身への所属」距離の近い者に所属」他者に所属」「話し手とのかかわり合いの長さ」等の諸要因がリストされてある (178 頁、表4)。「情報所持の確実性」「情報への関与度」ともに2分法でなく、無段階の程度を持つ。

岡本の研究は (著者はその書き方から神尾のなわ張り理論の理論的枠組について幾分批判的であるようにも受け取れるが)、「確実性」と「関与度」について詳細に検討したという意味で非常に意義深いものであるが、確実性と関与度 (およびその他の要因) について、「情報のな

わ張り」という概念のなかで包括的に論じていたなわ張り理論と大きく異なるものではない。岡本の提案は、なわ張りという概念の中で神尾に論じられていた「確実性」と「関与度」（に対応するような考え方）を独立させて論じたものであって、根本的に異なるものではないと言える。理論の組み換えをしたということも言えるが、それによってそれまで説明できなかった例が説明できるようになった（172 頁の反例 3）というが、解釈によってはそれも微妙なものである。いずれにせよ、岡本の提案は根本的には神尾のなわ張り理論とは変わらないと思われる。

2.5 情報のなわ張り理論：2002 年モデル

上述のような修正提案を受けてか否かは定かでないが、1987 年および 1990 年の理論提唱以来、なわ張り理論は変化を続けてきた。が、もっとも大きな変化は 1994 年の論文（Kamio 1994）でなされたように、それまでの 4 分割モデルから 6 分割モデルになったことであろう。1994 年以降の研究（Kamio 1995、1997a、1997b、神尾・高見 1998、Kamio 2001、神尾 2002）は基本的にその 6 分割モデルに基づいている。著者自身によるなわ張り理論の規定は 2002 年が最終形であって、神尾が考える最も理想に近いものであったと思われるため、ここではそれを 2002 年モデルと呼ぶことにする。ただし、6 分割という考え方自体は 1994 年の論文に端を発するものであることは重ねて強調しておく。

上述のように、情報のなわ張り理論においては、人間がある文を理解する際にその文の持つ情報を話し手（や聞き手）がどの程度「知っているか」「知らないのか」ということに着目する。1990 年モデルではまさに「知っている」か「知らない」の 2 分法であったが、2002 年モデルでは、「知っている」から「知らない」までの尺度・物差しであり、比喩的に以下のような図によって表すことができたとした。



この尺度において「1」はある情報を「よく知っている」「関わりが深い」「近い」ことを表し、「0」はその情報を「知らない」「関わりがない」「遠い」ことを表す。なお、この「1」「0」という値自体には意味はない。またその間に無限の中間段階があるとされている。

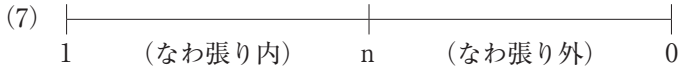
どういった規準で「関わりが深い」「近い」などの判断がなされるかは、理論の正当性を論じる上で非常に重要なポイントであるが、これを神尾は著作のなかで早くから論じている。理論が発展していくにつれて、少しずつ異なるのではあるが、以下には最新の神尾 2002 のものを挙げよう。

- (6) a. 内的直接体験を表す情報
 b. 外的直接体験を表す情報
 c. 自己の専門または熟達領域に関する情報
 d. 自己の個人的情報 (32 頁)

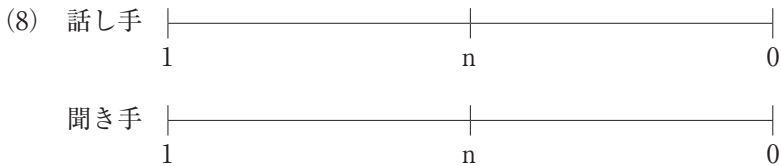
これらの情報は1もしくはより1に近い情報であるとされ、これらにあてはまらない情報は0もしくは0に近い（すなわち1から遠い）情報であるとされている。

このような尺度を基にしながら、理論ではひとつの区切りとして「n」という点が設定されている。そして、情報の値が「n」より大きい場合に、その情報は情報のなわ張り「内」にあるとされ、「n」より小さい場合に、情報のなわ張り「外」であるとされている。いわばこの

区切りが、まさしく「なわ張り」の境界線と言える。



そして、(少なくとも日本語においては) 話し手が自身に関してこのような尺度を持つのみならず、話し手は聞き手のなわ張り関係の尺度をも推測して認知していると主張されている。それを図にあらわせば、以下のようなふたつの尺度が話し手によって勘案されているということになる。



このように設定した時、文のあらわす情報が尺度上のどこに位置するといえるのかということと、言語における発話の形に対応関係が存在するというのが情報のなわ張り理論の根幹をなす主張である。

神尾の情報のなわ張り理論はその成り立ちおよび現在の理論の詳細のなかにおいて、日本語の文末形式との関連が大きくクローズアップされている。本稿の議論とは直接関係がないが、なわ張り理論に対する理解をより深めるために、それを一部だけ見てみよう。

神尾は、日本語の文末形式の一部は、情報のなわ張り理論の枠組内で説明されるべきであると主張しており、それは以下の例中の下線部分にみられる文末形式である。

- (9) a. お。今日はいい天気だね。
 b. なんか、アメリカでは大統領選挙で随分と盛り上がってるらしい。
 c. 彼は病気だ。
 d. ね。言ったとおり、あの店の料理はおいしいだろう？

これらの例では、言い切りの形（「直接形」と呼ばれる）や言い切りでない形（「間接形」と呼ばれる）が見られるのに加え、「ね」や「だろう」も使用されている。

これらの形式の使用は情報のなわ張り理論の枠組内で適切に説明されるとし、その関係を以下のように規定した。（表中の n 、 1 、 0 は前述と同じ意味である。S は話し手を、H は聞き手を表している。また A、B、BC などそれぞれのケースの名称である。）

(10) 状況と発話形（日本語の場合）¹⁾

状況	定義	発話形
A	$1=S>H<n$	直接形
B	$1=H\geq S>n$	直接ね形
BC	$1=S>H>n$	だろう形
CB	$H>S>n$	だろう形
C	$1=H>S<n$	間接ね形
D	$n>S\geq H$	間接形

(18-19 頁)

上述したように、文末形式の使用と本稿が目的とするところのものは直接関連はしていないため、ここではごく簡単に A と B と D のケース

1) これら等式・不等式への具体的な修正を含む興味深い提案が伊藤 2003 に見られる。

について例を挙げながら簡単にみてみよう。まずは A のケースである。

(11) あの人は病気だ。 (20 頁)

この文が使用される場面を想像してみると、話し手 S は「あの人は病気である」という情報を周知しており、その情報を知らない（と S が考える）聞き手に伝える場合である。つまり、S は 1 であり、H は 0 であるため、 $1=S>H<n$ に当てはまる。よって直接形が使用される。

続いて B のケースをみてみよう。

(12) ここは空気が新鮮だね。

この場合は話し手・聞き手ともに直接の体験をしているため、「ここは空気が新鮮である」という情報に対して「1」の尺度をとり、ゆえに $1=S=H$ となり、 $1=H\geq S>n$ が当てはまる。そのため直接ね形が用いられる。

次に D のケースをみてみよう。

(13) 彼女は病気みたいだ。

この例では、話し手は「彼女が病気である」という情報に対して確証をもっておらず、したがって 1 から 0 までの尺度で言うとかかなり小さい値しかこの情報に対して持ち合わせていない。またこの表現の場合、聞き手も同程度のもしくはそれ以下にしか小さい値を持っていないことは明らかで、ゆえに $n>S\geq H$ となり、「みたいだ」という間接形が使用される。

2.6 2002 年モデルの問題点について

以上のような変遷を経て現在の形になっている情報のなわ張り理論であるが、果たして現行の形が適切と言えるのかどうか筆者には疑問点がいくつかある。

1) 理論の形式とその合理性—6 分割について

最も気にかかるのは、1990 年モデルでは話し手・聞き手それぞれのなわ張り「内」「外」関係を基にした 4 分割という理論的に美しい姿が 2002 年モデルでは完全に崩れてしまっていることである。これは「だろう」という形を入れ込むためそれをせざるをえなかったということなのかもしれないが、結果的に理論の理解がより難しくなり、また直感的にも以前と比べて納得しにくいものになっていると感じる。

2) 「ね」について

「ね」というひとつの終助詞にすぎないものを理論の中で特別な位置づけをしているという点に関しては以前より（つまり 1990 年モデルから）異論の多かったところと思われる。「ね」と並んで分析されることの多い「よ」はもちろんまったく理論の枠組内には現れないのも、不自然と思われる。また、「ね」はこれも多くの研究によって指摘されているとおり、少なくとも見かけ上多くの用法が存在するが、理論の中に組み込まれた「ね」をもってしては、それらの複雑な用法を説明できるはずもないため、理論外の「ね」の規定に頼らざるをえず、そうとなわ張り理論の枠組内の「ね」の使用と枠組外の「ね」の使用

というふたつに分かれてしまうことになる。

3) 「だろう」形について

上述のように1990年モデル・2002年モデル両方において、「直接ね形」「間接ね形」に見られるように、具体的なひとつの終助詞「ね」を理論の根幹の枠組の中に入れ込んでしまっていることに多少の違和感を持った研究者も少なくないのではないと思われる。ところが、2002年モデルでは、「ね」に加えて「だろう」まで理論の根幹のなかに入り込んでしまっている。具体的な終助詞・助動詞というのは理論を用いて説明されるものであって、それ自体を理論の枠組自体の中に入れてしまうということを2002年モデルではさらに推し進めたため、理論としてのあり方に新たに疑問を感じる研究者もいたかもしれない。

これらの点などが、非常に気にかかるところである。しかしながら私見では、1990年の理論を発展・修正させる上でやや適当でない方向に進んでしまったが故の問題であって、情報のなわ張り理論が本来的にもつ可能性が否定されるべきものではもちろんない。なわ張り理論には大きな可能性があるのは疑いようのない事実である。以下、上述の問題に関して情報のなわ張り理論の修正案を提案する。

3. 提案

ここで、1990年および2002年モデルの情報のなわ張り理論への修正を提案したい。情報のなわ張り理論の枠組からすればかなり大掛かりな変更と言えるかもしれない。なわ張り理論にもいくつかの側面があ

るため、順を追って以下に説明する。

3.1 理論の枠組について

なわ張りの「内」あるいは「外」という概念は基本的に相対的であって、状況・聞き手・当該情報の性質により、なわ張りおよびなわ張り関係は変化すると考えられる。2002年モデルにおいては不等式という理論の構成にその考え方が取り入れられていると言えよう。一方、1990年モデルにおいては、そのような前提があるのかもしれないが、「内」「外」という明確な二項対立が理論の根幹で規定がされているだけに誤解を招きやすく、またなわ張りは状況により大きく変化するという我々の直感を十分にあるいは象徴的に表せていないと思われる。そこで本提案では、分割しないで話し手聞き手それぞれのスケールのようなものを前提とする。その意味では2002年モデルでの前提と同じと考えてよい。

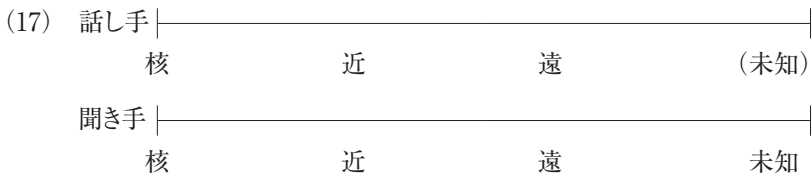
(14) 話し手 |—————|

話し手に最も近い情報から最も遠い情報まで無段階に尺度が存在すると規定する。話し手は当該情報が自らのなわ張りにおいてどの段階になるか常に、無意識的に計算していることを前提とする。また、同時に話し手は聞き手のなわ張りについても同様のことを常に推定していることを前提とする。

(15) 話し手 |—————|
聞き手 |—————|

上述のように連続的段階を想定するが、一方で Muraki and Koizumi 1989 で提案されたように明確な区分を設けるのも説明の便宜上わかりやすい。そこで本論文では Muraki and Koizumi の提案を援用して説明を進める。ただし、そのような区分が本質的なものかどうかは当然検討を要する。

- (16) 1. 連続的な段階がある
 2. 便宜的に「核情報」「近情報」「遠情報」「未知」と区別する
 3. 話し手は聞き手の情報状態についても推定をし、状況に応じてその推定結果を使用する



話し手が自分自身にとっての未知情報を発話することはないため、「話し手」の尺度中の未知の箇所は括弧に入れてある。情報の連続体の規準、すなわちどのような情報がより核情報に近いかあるいは遠情報に近いのかは神尾が挙げているものがほぼ正しいと考えるため、ここではそれを援用する。上掲したが、以下に再掲する。

- (18) a. 内的直接体験を表す情報
 b. 外的直接体験を表す情報
 c. 自己の専門または熟達領域に関する情報
 d. 自己の個人的情報

なわ張りというのは比喩にすぎないので、これは「確信度」「関わり」「証拠性」というものと基本的には同じものと考えることができる。それぞれの用語の定義次第ということになる。

情報のなわ張り理論は1990年モデルおよび2002年モデル両者において情報の「内」「外」等に基づく4分割、あるいは等号・不等号による6分割が設定された。それぞれの分割は直接形・間接形、終助詞「ね」あるいは助動詞「だろう」との関連が規定された。しかしここでは、情報のなわ張り理論の理論的枠組内では具体的な語彙との関連は規定すべきでないとする。直接形・間接形はともかく、「ね」あるいは「だろう」という特定の語彙がそのような特別な扱いを受けるという根拠がない。むしろ理論としては、上述のように話し手あるいは聞き手の情報のなわ張りおよびその基準のみ設定し、その枠組において各語彙の意味記載の中でなわ張り関係の記述が求められるというようにしたほうがより明確でわかりやすいと思われる。

ここでまとめると、情報のなわ張り理論（1990年モデルおよび2002年モデル）と自説との違いは以下のようなものになる。

- (19)
1. 理論の枠組において「なわ張り内」「なわ張り外」という区分を設けない（2002年モデルにおいてはnという値が理論の中に組み込まれている）
 2. 話し手のなわ張り聞き手のなわ張りとの関連を理論の枠組では規定しない（2002年モデルでは不等式で表されている）
 3. 「ね」や「だろう」という具体的な語彙はもちろん、「直接形」「間接形」というカテゴリーとなわ張りとの関連も理論内では規定しない

理論の根本を上述のように簡便なものにしたうえで、なわ張り理論の枠組を利用して説明できるものがあるという記述になる。

3.2 直接形・間接形について

いわゆる「直接形」という名称ではあるが、これには該当する語彙が存在しない。すなわち「間接形」が「らしい」「みたいだ」「って」等の一群の語彙を指すと言えるのに対し、「直接形」というのはそれらが存在しない文末形式を指すに過ぎない。前節で提案したような各語彙での意味記載の中でなわ張り関係を明示するということは不可能と思われる。代わりに、これは間接形への意味記載をすることで十分であろう。記載の前提として：

- (20) 間接形：当該情報が話し手の情報のなわ張りの「遠情報」のときに使用される

ということである。このような制約を表すものとして、各語彙にそれを記載することが必要となる。

- (21) 「らしい」 伝聞〔遠情報〕
「みたいだ」 推定〔遠情報〕
「って」 伝聞〔遠情報〕

それぞれの「伝聞」「推定」などという意味記載は便宜的に与えられたものであるが、それに続く〔遠情報〕が当該語彙のなわ張り関係を規定する意味記載となる。(そもそも意味記載とはどういうものか、ある

いはどのような形式でなされるかということは非常に難しい問題であり、またこの論文のカバーできる範囲を大きく超えているため、ここではもちろん触れない。しかし、どのような形式で意味記載がされようとも、(20) のような制約に基づく記載は可能であるはずである。)

いわゆる「間接形」には、「近情報」すなわち比較的強い確信を持っている情報であっても、主に丁寧さ・あるいはなわ張り関係上の気遣いから故意に間接形が使用されるという事例が多いことは神尾も指摘していることである。

(22) この壺は少し傷があるようですね。 (Kamio 1997b, 19 頁)²⁾

この例は話し手にとって「この壺は少し傷がある」とう情報は「近」であるにもかかわらず、壺については聞き手と比してよりなわ張り内に入る聞き手である骨董商への配慮により、故意にその情報は「遠」であるかのような表現を使用したということである。

実際に同じ話し手が後に家族に報告する場合は「みただ」を使用しないのが妥当であることから聞き手への配慮であることが分かる。

(23) 壺は買わなかったよ。少し傷があったんだ。

なわ張り関係に基づく配慮から故意に「遠情報」を含む語彙を選択するのは聞き手のみならず、その情報が言及する人物である場合ももちろんある。

2) 原著は英語であるためアルファベット表記であるが、引用に伴って同じ内容を漢字かな表記に改めた。

(24) (雑誌のインタビューで映画俳優が言う)

監督はオフにはよく箱根にいらっしゃるらしいんですよ。

という表現は十分考えられるが、これはこの映画俳優が直接その話を監督から聞いていたとしても同じである。これを：

(25) ? 監督はオフにはよく箱根にいらっしゃるんですよ。

というと、監督との親密な関係が想像され、実際の関係によっては不適切な使用となる。

この例における「らしい」使用は、「監督はオフによく箱根に滞在する」という情報を自身の「近情報」と分類していることを明示するのは情報のなわ張り関係上、適切でないという判断が映画俳優にはある。このような例も「らしい」が情報の確実性に基づく意味記述のみでなく、「遠情報」という記述が含まれていてこそ可能となる。

3.3 「ね」について

前述したとおり、終助詞「ね」は情報のなわ張り理論の1990年モデルおよび2002年モデルの両方において非常に重要な役割を担っている。しかし、本修正提案においては理論の枠組には含めないようにすることを提案した。すなわち、なわ張り関係の記述は「ね」という語彙項目の意味記載の中に含めるべきという提案である。

「ね」の例を神尾が挙げたものもいくつか交えつつ、また本修正提案の枠組である核／近／遠／未知情報という情報も付加しながら見てみよう。(「ね」の用法の細かな観察は岩畑2009aで行ったのでそちらも参照してもらいたい。)

(26) (好天のもと)

いやあ、いい天気ですね . . . 話し手・聞き手ともに核情報

(27) (テレビ等で情報を得た)

アラスカの冬は寒いらしいね . . . 話し手・聞き手ともに遠情報

(28) (話し手は東京在住・聞き手はアラスカ在住)

アラスカの冬は寒いらしいね
. . . 話し手には遠情報、聞き手には核情報

(29) A: これはいくらですか?

B: えっと、これは 500 円ですね
. . . 話し手 B には核／近情報、聞き手には遠情報

(30) (話し手が歯科医の聞き手の治療を受けている最中。ふたりは旧知の仲)

痛い！ずいぶんと痛いんだね
. . . 話し手には核 聞き手には近／核情報

情報関係からだけ見ても「ね」が使用される場面は非常に多岐にわたっていることがわかる。(26) と (27) のみを見ると、それぞれなわ張り関係「核」あるいは「外」という決定的な違いはあるものの、話し手・聞き手のなわ張り関係がほぼ同等であると思われる。しかし一方

3) 岩畑 2009a/b においては「『ね』は当該情報が共有情報であることを明示する標識」としたが、ほぼ同じ事を別の言い方で言い換えたものと言える。「情報」の側面から定式化するか、情報が入る「なわ張り」の側面から描写するかの違いと言えよう。

で(28)においては話し手は「外」、聞き手は「核」であって、もちろん同等では全くない。(29)(30)ともにケースは違うが、やはり同等とも言えない。これら5つの例の共通性といえ、すべてのケースにおいて話し手・聞き手ともに「未知」でないということぐらいである。³⁾

岩畑 2009b において、上述の用例を含む「ね」の用法を検討し、その機能について提案をした。そこでは情報のなわ張り理論という枠組は利用していないが、しかし情報のなわ張り理論の枠組を利用した言い換えは以下のように可能であろう。

- (31) 「ね」は当該情報が話し手と聞き手両者にとってほぼ同等の近接性があるという話し手の認識を明示的に示すための標識である

このようにすれば、なわ張り理論とは独立に、そしてなわ張り理論で説明していた「ね」の使用も同様に説明可能であるように思われる。

修正提案の利点のひとつとして、「ね」が理論中の特別な位置を占めないということがある。同様の方法で、頻繁に「ね」とならび分析される「よ」も分析可能になる。すなわち、「よ」は当該情報が聞き手にとって未知あるいは実質上の未知（本来知っているが発話時点において聞き手が忘れている、あるいは忘れているように思われる）である情報である場合に使用されるというものである。

3.4 「だろう」について

「だろう」は2002年モデルにおいてそれを文末形式とする分類がふたつ新規に追加され、なわ張り理論が6分割になる契機となったものであり、その意味で2002年モデルにとって重要な位置を占める助動詞である。本論文において提案しているなわ張り理論の修正案では理論

内での「ね」や「だろう」という個別語彙の使用をなくしたため、上述の「間接形」や「ね」のケースと同様、「だろう」の意味記述の中になわ張り関係に関する記述を用意する必要があるだろうか。以下の例を基に「だろう」を見てみよう。

- (32) (A は自分が作曲した曲を B に聞かせている)

A: いい曲だろ？

・・・話し手 A には核情報、聞き手 B には近情報

B: いい曲ですね

- (33) (聞き手の妹が今度結婚する)

今度妹さん、結婚するんだらう？

・・・話し手には近情報、聞き手には核情報

このふたつの例中の関連するなわ張り関係はまったく逆である。「だろう」が持つ「確認」の意味合いも考え合わせれば「だろう」の中に情報の近接性に関わる記述が必要であるようには思われない。

4. その他の事象との関連について

岩畑 2005 において「おめでとう」という表現の意味記述になわ張り関係のものを記述する分析を行った。例を挙げてみよう。

- (34) (大学に合格した友人に向かって)

おめでとう！

(113 頁)

(35) (優勝チームのメンバーの1人が他のメンバーに向かって)

*おめでとう！ (114頁)

これらの例の違いを、「おめでとう」という発話の基となっている事態の表す情報（「大学に合格した」「チームが優勝した」）が話し手・聞き手の情報のなわ張りとはどのようにかかわっているかということで説明を試みた。すなわち：

(34) の例：話し手<聞き手

(35) の例：話し手=聞き手

である。「おめでとう」とは話し手<聞き手でなければ使用できない表現であることを分析した。

これらに関しては本修正案の枠組でそのまま記述可能であるため、問題はない。すなわち、「おめでとう」という表現の中に、なわ張りに関する記述をしておくこと、つまり「おめでとう [なわ張り関係が話し手<聞き手であること]」のように記載することで説明できよう。

5. おわりに

本論文では、「情報のなわ張り理論」およびその理論的構成についての一連の研究の関連する箇所を概観したのち、現行の2002年モデルへの修正を提案・検討した。具体的には：

(36) 1. 理論の枠組において「なわ張り内」「なわ張り外」という区

分を設けない

2. 話し手のなわ張り聞き手のなわ張りとの関連を理論の枠組では規定しない
3. 「ね」「だろう」「直接形」「間接形」というカテゴリとなわ張りとの関連も理論内では規定せず、それぞれの語彙の中でなわ張り理論に基づく意味記載をする

これらにより、従来のなわ張り理論はスリム化され、いくつかの問題（6分割と直感的な問題、「ね」や「だろう」といった具体的な語彙が理論の根本的なところに使用されていること）が解決するのではないかという提案を行った。

参考文献

- 伊藤文志（2003）「談話における情報のなわ張り―肯定応答文形式の分析―」、『沖縄大学人文学部紀要』第4号、69-83頁。
- 岩畑貴弘（2005）「情報のなわ張り理論から見た『おめでとう』」、『神奈川大学人文研究』第156号、105-125頁。
- （2009a）「日本語の終助詞「ね」を通してみる「共有」と「コミュニケーション」について（第1部）」『神奈川大学人文研究』第167号、51-114頁。
- （2009b）「日本語の終助詞「ね」を通してみる「共有」と「コミュニケーション」について（第2部）」『神奈川大学人文研究』第168号、79-111頁。
- 岡本真一郎（1996）「情報への関与と文末形式―「情報のなわ張り理論」の批判的検討と新モデルの提案」『心理学評論』第39巻2号、168-204頁。
- 神尾昭雄（1990）『情報のなわ張り理論』東京：大修館書店。
- （2002）『続・情報のなわ張り理論』東京：大修館書店。
- 神尾昭雄・高見健一（1998）『談話と情報構造』東京：研究社出版。
- 金水敏（1991）「伝達の発話行為と日本語の文末形式」『神戸大学文学部紀要』第18巻、23-41頁。

- Kamio, Akio. (1979) On the notion Speaker's territory of information: A functional analysis of certain sentence-final forms in Japanese. In G. D. Bedell, E. Kobayashi, M. Muraki (eds.), *Explorations in Linguistics: Papers in Honor of Kazuko Inoue*. Tokyo: Kenkyusha.
- . (1987) *Proximal and Distal Information: A Theory of Territory of Information in English and Japanese*. Ph. D. Dissertation: University of Tsukuba.
- . (1994) The theory of territory of information: The case of Japanese. *Journal of Pragmatics* 21: 67–100.
- . (1995) Territory of information in English and Japanese and psychological utterances. *Journal of Pragmatics* 24: 235–264.
- . (1997a) Evidentiality and some discourse characteristics in Japanese. In Akio Kamio (ed.), *Directions in Functional Linguistics*. Amsterdam: John Benjamins, 145–71.
- . (1997b) *Territory of Information*. Philadelphia: John Benjamin.
- . (2001) English generic *we*, *you*, and *they*: An analysis in terms of territory of information. *Journal of Pragmatics* 33: 1111–1124.
- Muraki, Masatake and Masatoshi Koizumi (1989) Territorial relations and Japanese final particle. In Kazuko Inoue (ed.), *Theoretical and Empirical Studies of the Properties of Japanese in terms of Linguistic Universals*. Monbusho-Grant for Specially Promoted Project Research, vol. 5, 123–130.